

UNICEF と JICA のつどい Rwanda Day

第二部 講演会

～ルワンダの内戦から学んだこと～命の尊さ、教育と平和の大切さ～

日時：2015年10月18日（日）

会場：佐賀商工会館 1階佐賀県国際交流プラザ

講師：永遠瑠マリルイズ氏（NPO 法人ルワンダの教育を考える会 理事長）

以下は、講演会の概要です。

JICA と UNICEF の活動紹介 VTR 視聴後、マリルイズ氏による講演会が始まりました。以下、講演会概要。私は 22 年前に来日し、現在福島県福島市在住。日本の国籍も取得し、永遠にルワンダを忘れないという意味を込めて永遠瑠という名前を選んだ。今日は、命、教育、平和、3つの話をする。

ルワンダも、昔から日本の支援を受けている。独立して銀行が初めてできたとき、初の中央銀行総裁は日本人。また、ルワンダには鉄道がなくバスが主だが、このバスは日本の ODA によるもの。乗り心地がよく事故も起こりにくいこのバスには、日本とルワンダの国旗が描かれていた。日本の支援が届くとニュースになるので、ルワンダ国民はみな、日本のことを知っていた。私が来日したときも、「日本人もルワンダのことを知っているだろう」と思っていたが、それは違っており、ほとんどの日本人がルワンダがどこにあるのかも知らなかった。

コンゴ、ウガンダ、タンザニア、ブルンジに隣接するルワンダの面積は四国の 1.4 倍。人口は 1100 万人超えなので人口密度が高い。子どもは 1 世帯あたり平均 5 人。国民の約半数が 25 歳未満。

ここからはルワンダの歴史。もともと平和だったルワンダ王国だが、1889 年ドイツの植民地となる。第一次世界大戦で敗戦するとベルギーの植民地へ。そこでフランス語が導入される。それまで文字がなく、歴史は人から人へ言葉で伝えられていたが、フランス語（文字）が導入されると、エリートの人たちだけに教育のチャンスが与えられ、その他の人々のなかで不満がつるようになる。そして 1994 年 4 月。タンザニアでアルーシャ和平合意が結ばれ、だれもが「ルワンダに平和が戻る」と信じた矢先、大統領の乗った飛行機が何者かによって撃ち落された。このことがきっかけで、ルワンダ大虐殺がはじまる（～1994 年 7 月）。

現在は、憲法ができ、その憲法によって大統領選挙、国会議員選挙が行われるようになった。女性国会議員がなんと 57.5%。世界一女性国会議員の多い国である。少しずつ明る

イルワンダになってきている。

私はもともと裁縫の専門学校に勤めていた。その時に青年海外協力隊としてルワンダに来ていた日本人と出会った（一緒に裁縫を教えていた）。彼らのカウンターパートナーとして働いていた私はその後、推薦を受けて来日し、福島の学校で研修を受けることに。ホームステイをして、二か月間まずは日本語学校へ通った。ホームステイ先は80歳のおばあちゃん。このおばあちゃんは、毎朝起きると必ず新聞を読むことから一日を始めており、私はそのことに大きな衝撃を受けた。なぜなら、私の母は読み書きができない。思わず、「母も読めたらいいのにな」と呟いた。みなさん、もし自分が文字を読むことができなかつたらどんな人生になっていたか、考えてみてほしい。文字が読めれば、書物を手に取って読み、共感したり夢をもったりすることができる。

おばあちゃんによる優しく厳しい指導のおかげで、二か月後、私は日本語を話すことができるようになっていた。言葉が伝わると楽しく、友達もできた。

研修を終え、1994年2月にルワンダへ帰国。その2か月後に、内戦が勃発。1994年4月6日、この日は突然やってきた。私は危険を感じたので子ども3人を連れて、ハンドバッグひとつを手に取り家を出て逃げることにした（主人は遠く離れた地で単身赴任中）。生きるためには信じられない力が出るもので、この時50kmほど走り続けた。子どもたちが動けなくなって泣いているとき、ある若者がパンを差し出し、高値で売ると言った。ハンドバッグにお金が入っていたので買うことができたが、開いてみるとカビの生えたパン。子どもたちに食べさせるか迷ったが、カビを取り除いて食べさせた。パンを食べた子どもたちは少し元気を取り戻し、なんとか難民キャンプにたどりついた。ここでは、学んだ日本語が奇跡を起こす。アムダというNGOのお医者さんと出会い、日本語ができるなら通訳をしてほしいと言われ、これが生きる希望への第一歩となった。子どもはカビの生えたパンを食べたせいで赤痢になってしまったが、この医者のおかげで治すことができた。ハンドバッグに入っていた辞書を使い、通訳を行った。その後主人とも再会し、無事に留学生として再来日、ルワンダの教育を考える会を立ち上げた。この活動を通して、ルワンダに図書室やパソコン教室、給食室のある学校を建設。ゆくゆくは世界にはばたく人材を育てたい。

生きて、学んだことがあるからこそ夢に向かっていける。これまでの人生でそのことを身をもって実感したのでみなさんにも伝えたい。